

わが国における初期寺院の成立

森 郁夫

はじめに

百済からの仏教公伝の年に対する二説については、おおむね西暦五三八年説に落ちついている。それは『上宮聖徳法王帝説』¹と、『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』²(以下『元興寺資財帳』と略す)に記す戊午の年伝来が詳細に検討されての結果である。したがって、『日本書紀』に記される欽明天皇十三年の年を、西暦にあてはめた五五二年はほぼ否定されている。いずれにせよ、仏教を朝廷として受け入れることができなかつたのは、欽明朝と安閑・宣化朝の並立という事態があつたからである。³五三九年、宣化天皇崩御によって二朝並立の事態は解消したとはいふものの、欽明朝を支える諸豪族の軋轢は深刻なものがあり、朝廷として仏教を正式に受け入れることができず、公認に至ることができなかった。

しかし、この時に仏像・荘嚴具・経典等が百済から朝廷にもたらされたことは確かなことであろう。こうした形の他にも、何等かの形で仏教がわが国に伝えられていたであろうことは、司馬達等の嘗

んだ坂田原草堂に関する伝えからも推しはかることができよう。⁴

仏教伝来後、仏教活動の場である寺の造営は、その実体が確認できる範囲では飛鳥寺の建立が最初であつた。飛鳥寺の造営は、本来は朝廷が行うべきものであつたと考えられるが、直接の造営者は蘇我氏であつた。蘇我氏は後述するように、常に帰化系氏族と近い関係をもっていた。したがって、百済から直接伝えられた寺造営に関する技術以外に、当時の斬新な知識・技術を有する工人集団を擁していたものと考えられる。そのような工人集団を動員しての寺造りであつたらう。その後次第に寺造りの機会が増えるのであるが、ごく自然に寺々が造営されていったわけではない。小稿は、初期における寺院造営に関わるいくつかの問題点について若干の考えを述べらるものである。

一 仏教伝来

わが国における仏教受容、そして寺院の造営は、当然のことながら周辺の国々に触発されたものである。したがって、六世紀代にお

いて仏教が周辺諸国でどのような状況であったのか、そのあたりを概観しておく。

中国に仏教が伝えられた年代は明確でないが、後漢代には確実にとり入れられたとする見解が有力である。初期の段階の仏教は西域から伝えられた。そして、後漢が減じた後も次第に仏教が広まり、三国時代を経て、晋代の四世紀初頭にはすでに寺院数が九百か寺近かったと一説には伝えられる。

四世紀後半には阿弥陀・弥勒・観音信仰が始まり、敦煌莫高窟が開かれたのもこの頃のことであった。四世紀末から五世紀初頭にかけては、中国僧のインドへの求法が相次ぐ。五世紀半ば、北魏太武帝によって廃仏毀釈が行われるが、仏教は再び復興し、雲崗石窟や龍門石窟が開かれるなど、仏教はますます隆盛の一途をたどるのである。

朝鮮半島でまず最初に仏教を取り入れたのは高句麗であった。すなわち小獸林王二年(二七二)、前秦王によって高句麗に順道が遣わされ、仏像・経論がもたらされたのである。その後間もなく肖門寺、伊弗蘭寺などが創建される。百済には隣国高句麗からではなく、枕流王元年(二八四)、東晋から派遣された僧摩羅難陀によって仏教がもたらされ、翌年には早くも漢山に寺院が建てられたという。新羅は両国よりかなり遅れ、法興王十五年(五二八)に高句麗から仏教が伝えられた。そして同王二十一年(五三四)には興輪寺や永興寺の造営が始められたと伝えられる。こうした仏教の伝播は、当時の国際交渉の動きのひとつであった。

中国大陸や朝鮮半島三国への仏教の伝わりかたはこのような状況であったが、朝鮮半島三国の相互の立場は微妙なものがあり、百済

は高句麗と新羅に圧されており、わが国に仏教を伝えることによつてより親密な環境を作りたかったのであろう。それが五三八年でなければならなかったのには、百済側にも逼迫した事情があったからなのである。その年、五三八年に熊津(公州)から泗泚(扶余)に遷都している。遷都の事情についてはいくつかの見方があるが、当時強大な勢力をもって南進していた、高句麗の圧力に対する面があったことはいなめない。したがって、百済としてはわが国との連携を目的として、仏教を伝えるのに五三八年という年でなければならなかった。百済が宣化朝ではなく、欽明朝に仏教を伝えたのは、おそらく継体天皇崩御後の跡を嗣いだことを、欽明側が百済をはじめとする東アジア諸国に知らしめていたからであろう。

すなわち、継体天皇二十五年の天皇崩御に関する『日本書紀』の記事に、「(前略)しかるに此に二十五年歲次辛亥に崩ずると云うは、百済本記を取りて文と為すなり。其文に云う。(中略)又聞く、日本の天皇及び太子・皇子、俱に崩じ薨す。(以下略)」とあるところは常々注目されるところである。これは、継体朝末年に何らかの争乱があったことを示すものであるが、百済にのみその事が伝えられたのか、たまたま百済本記に記載されたものが残ったのか、明らかではないが、欽明朝側の立場からすれば、少なくとも当時の朝鮮半島諸国に、継体天皇崩御の事情と、その跡を嗣いだことを報じたものと考えられる。そのような事情があったことによつて、百済が欽明朝に仏教を伝えたと考えられるのである。

わが国において、仏教が東アジアで共通の宗教になっていたことを承知していたのは、おそらく蘇我氏を中心とするグループだったのであろう。いわば開明的なグループである。したがって、必然的

にこれに対するグループが存在する。そしてこれら二つのグループの対立が生ずる。いわゆる崇仏派・排仏派の対立である。これが抗争に発展する。この抗争は、よく言われるように単に宗教上の対立ではない。明らかに政治上の抗争なのである。結果的には、「国際主義」を標榜した蘇我氏グループが勝利を納めることになった。

五三八年に伝えられた具体的な内容は、『日本書紀』『元興寺資財帳』の両者をつき合わせることでよって知ることができる。『日本書紀』では金銅の釈迦像、幡・蓋等の莊嚴具、經典であり、『元興寺資財帳』では太子像、灌仏の器、經典である。仏像が金銅の釈迦誕生仏であったことが知られる。⁵⁵⁾

一 史料に見える寺院造営

仏教伝来後、飛鳥寺造営に至るまでの寺院造営に関しては『日本書紀』をはじめとするいくつかの史料にその名が見えるが、遺跡として確認されたものはない。しかし、遺構の面からすれば、寺の概念である「礎石建ち・瓦葺き」という形で営まれたものでないと思えば、これを確認することは困難であろう。仮に仏殿・回廊ともに掘立柱建ちであれば、遺跡の上からは宮殿と何ら変わるところはない。掘立柱建ち仏堂の可能性として、下総郷部遺跡がある。⁵⁶⁾それは奈良時代から平安時代にかけての遺跡であるが、L0c15・20遺跡では、奈良時代から平安時代にかけての竪穴住居跡群とともに四面廂付きの掘立柱建物が検出された。瓦の出土は見られないが、「忍保寺」「新寺」「寺」「忠寺」等の墨書土器が出土し、村落内に建てられた仏堂の可能性が考えられている。L0c15遺跡では掘立柱建物が竪

穴住居群の南東辺部の広場に建てられており、その配置を見ると、四面廂付きの建物（桁行・梁間ともに五間）の南側に両妻柱筋をそろえて、桁行四間・梁間二間の掘立柱建物がある。これはいかにも礼堂的な感じをもたせる。

他の堂宇、講堂・食堂・僧房にしても掘立柱建物であれば一般の建物との区別はつきにくいであろう。ただ、塔の場合には掘立柱建ちの可能性は少ないといえよう。もっとも、法隆寺西院五重塔のように、地下式心礎に据えられた心柱の根元が腐食し、心柱が軸部に支えられていた状況にあったことを考えれば、掘立柱建ち塔も考えられないこともなからう。

さて、実体がどのようなものであったかは別として、寺院造営に關したものが史料にいくつか見られる。

まず『日本書紀』に見える欽明十三年十月の仏教伝来の記事には、いろいろな論議の結果、仏像は蘇我稻目がとりあえず小墾田家に安置し、ついで向原家を寺にしたとある。具体的にどのような寺が造られたのかわからないが、記録上初めての寺となった。百濟からもたらされた仏像は、さきに述べたように太子像であった。飛鳥時代の太子像の大きさは一般おおむね十センチ内外である。おそらく厨子に納められ、さほど莊嚴具も多くない仮の寺だったのでなかろうか。その後まもなく疫病が流行し、その原因が仏像を祭ったことにあるとの物部方の意見により、その年にはすでに仏像が捨てられ伽藍が焼かれてしまう。

敏達六年（五七七）十一月紀に大別王が造寺工を伴って百濟から帰朝した次のような記事がある。

「冬十一月庚午朔、百濟国王還使大別王に付けて経論若干卷、並び

に律師、禪師、比丘尼、咒禁師、造仏工、造寺工六人を献る。遂に難波の大別王の寺に安置す。」

これより先、五月紀の記事に大別王と小黒吉士が、百済に派遣されたことが見える。大別王についてはこの二つの記事以外には史料に見えず、どのような人物なのか確かなことは分からない。しかし、この時期に百済に派遣されたことは、帰化系氏族との関わりが密接であったためではなからうか。ここに示された記事自体は、内容がきわめて具体的である。すでに難波に大別王の寺が存在していることが記されているが、これは飛鳥寺造営の十年前のことである。先進文化を受け入れる窓口とでも言うべき難波であればこそその感がないでもない。そしてこの記事によれば、新たに寺を建立する意図が知られる。単に造寺工だけでなく、造仏工や、寺院で必要な経典、僧尼までが伝えられており、本格的な造寺活動が始められる様子だろうかということが出来る。

百済から派遣された六人は、いわば一つの組織として構成されていたように考えられる。律・禪・尼の僧侶と工人の組合せ、これに加えて呪禁師である。呪禁師が養老令に規定されたような、医薬に関わる性格のものであったか否か定かでないが、その者が医療技術を身につけていた可能性が十分考えられる。まさに新たな文化が揃えられて、わが国に伝えられたというように考えられるのである。その後この計画がどうなったのか全く知られない。

五月の大別王の派遣は、その記事の書き方からすれば当然のことながら朝廷からの派遣である。しかし、この記事に記された事柄が事実であったとすれば、帰朝後の記事が全く見えないのは、寺造りの計画そのものが反対勢力の前に潰えさったからなのであろう。

敏達八年(五七九)十月紀には、新羅から仏像が送られてきたことを記している。史料によっては、それが釈迦像であって興福寺東金堂にあるとしているが、⁶⁷⁾実際にはその仏像がどのような像形なのか、そしてどこで祭られたのかもわからない。

敏達十三年紀には、蘇我馬子が得た弥勒の石仏など仏像二体を祭るために、司馬達等に命じて僧侶を探させた記事と、仏殿を自らの宅の東方に建てた記事が見られる。さらに、仏教を篤く敬った司馬達等が舍利を得たために仏殿を石川の宅に建てたことが記されている。また、この時に得た舍利を祭るために蘇我馬子が、大野丘の北に塔を建立したことが敏達十四年二月十五日紀に見える。舍利は心礎の舍利孔ではなく「柱頭」に納めたと、これまた具体的に記されている。

用明二年四月紀には鞍部多須奈が、病の重い天皇のために仏像と寺を造る記事が見える。そして「今南淵の坂田寺の木の丈六の仏像、挾侍菩薩是なり」とある。したがって、建立された寺も坂田寺を意味するのであろう。坂田寺の縁起についてはいろいろなものがあり、創建の年を最も古くしているのは『扶桑略記』の欽明天皇十三年の条に「第廿七代継体天皇即位十六年壬寅、大唐の漢人鞍部村主司馬達止、此の年春二月入朝す。すなわち草堂を大和高市郡坂田原に結び、本尊を安置し帰依礼拝す。世を挙げて云う、是れ大唐の神と(以下略)」とある記事である。⁶⁸⁾欽明朝に仏教が伝えられる以前に、すでに私的に仏教・仏像がもたらされたことになるが、坂田寺がそうであったか否かは別として、そのようなことは当然あったものと考えられる。

崇峻天皇即位前紀に、蘇我・物部の戦いの中で四天王寺建立の発

願が行われた記事が見られることはよく知られている。崇峻元年、百濟から舍利・僧侶と共に造寺に関する技術者集団がもたらされた。そして造営されたのが法興寺すなわち飛鳥寺である。実際に工事が開始されたのは、「山に入りて寺の材を取る」とある崇峻三年かと思われるが、この年の三月の記事には百濟に遣わされていた善信尼等が帰朝し桜井寺に住んだとある。この記事からすれば、すでに桜井寺が存在したことになる。

善信尼が百濟から帰って桜井寺に住んだことに関しては、『上宮聖徳法王帝説』の「裏書」⁹や『元興寺資財帳』¹⁰にも見えており、『上宮聖徳法王帝説』「裏書」には桜井寺は「今豊浦寺也」とある。この記事からすれば、桜井寺は豊浦寺の前身の寺名ということになる。『元興寺資財帳』には桜井寺あるいは桜井道場の名が随所に見える。そしてこの桜井寺は「牟久原殿」すなわち向原家からの発展という意味の表現がなされている。豊浦寺については、現在の向原寺を中心としたかなり広い範囲が想定されている。発掘調査が奈良県教育委員会や奈良国立文化財研究所によって幾度か行われ、実際に七世紀初頭の遺跡や遺物が確認されているが、桜井寺との関係は一切不明である。また、豊浦寺の塔に関わるかとみられる記事が『元興寺資財帳』にある。それは、さきの蘇我馬子発願によって大野丘に建てた塔のことではないかと思われるものである。すなわち、敏達十四年二月十五日に、その前年に司馬達等が得た舍利を祭るために「止由良佐岐に刹柱を立つ」とある。『日本書紀』の記事と年月日が一致しているの、同じ塔を指していると思えるを得ない。¹¹

さて、このように史料の上からはいくつかの寺が建立された様子をつかうことができるが、建立地が想定されるものが含まれると

はいうものの、それらの実体は明かでない。さきにふれた、司馬達等が感得した舍利を祭るために蘇我馬子が建立を発願した「大野の丘北塔」は、奈良県橿原市和田町の和田廃寺がそれであろうと考えられていた。その地には「大野塚」と呼ぶ土壇が残っており、周辺には「トノング」¹²「寺スキ」の字名が見られる。昭和四十九・五十の両年度に、奈良国立文化財研究所によって「大野塚」を中心とした地域で行われた発掘調査では、七世紀前半の遺物が出土し、「大野塚」が塔の基壇であることが確認されたものの、それは七世紀後半に築かれたものであった。¹²

二 畿内の初期寺院

崇峻三年（五九〇）、飛鳥寺の造営工事が開始されたことが『日本書紀』によって知られる。これより先、崇峻元年に造寺工、鑄造工、瓦工、画工等の技術者集団が百濟から渡来し、これらの工人を中心として飛鳥寺の造営工事が具体的に始められたのである。『日本書紀』には飛鳥寺の造営に関する記事がいくつか見られ、その経過を知ることができる。正史である『日本書紀』にこれほど寺の造営経過を詳しく記した記事は他に見られない。おそらくわが国で最初に行われた寺院造営工事だったからで、まさに特筆すべきことであつたためと考えられる。その経過はつぎのようである。

崇峻元年（五八八） 百濟から工人集団渡来・寺地選定

三 （五九〇） 建築用材の伐採

五 （五九二） 仏堂と回廊の造営工事

推古元 （五九三） 塔心礎に仏舍利安置

塔心柱立柱

四 (五九六)

造寺完了。高句麗僧惠慈・百濟僧慧聰が寺に居住

十三 (六〇五)

鞍作鳥に銅繡丈六仏像の造像を命ず
高句麗王から黄金三百両を贈られる

十四 (六〇六)

銅繡丈六仏像完成。銅像を金堂に安置

推古四年の記事に、寺の造営工事が完了したように記すところがある。ここには「法興寺造り竟んぬ。則ち大臣の男、善徳臣を以て寺の司に拝す」とあり、これに続けて高句麗僧惠慈と百濟僧慧聰の両名が、寺に居住するようになったことを記している。この記事による限り、造営工事が完了したように見受けられるが、しかし推古十三・十四両年には丈六仏像の造像に関する記事がある。そして、『元興寺資財帳』には「露盤銘」をひいて、この年には金人すなわち金銅の仏像を造らせたとある。さらに『元興寺資財帳』を見ると、「元興寺丈六光銘」をひいて推古十七年に丈六仏像を造り終えて寺に安置したとある。したがって、推古四年の記事は中心伽藍の堂塔のみの完成を示すものであり、仏像などの造作工事はなお続けられていたのである。

この間、百濟からの工人集団がそれぞれの分野でどのようにして工事を進めたのか、具体的な記載はない。しかし、本国での技術を持ち込んだものであるから、当然のことながら百濟の寺に似たものが作られたにちがいない。百濟の文化を直接受け入れたものとしてよくとりあげられるものに、軒丸瓦の瓦当文様がある。蓮弁が十弁で作られているが、作られた軒丸瓦はまさに百濟瓦当そのものといえることができる。

遺構の上からは、塔の基壇に百濟時代との同一性を見ることができ。すなわち掘り込み地業、版築、地下式心礎、二重基壇等であり、例をあげれば扶余定林寺¹³の発掘調査では版築が確認され、扶余軍守里廢寺¹⁴では地下式心礎が確認されている。また、飛鳥寺で発見された特殊な基壇、下成基壇に小礎石を置いた二重基壇¹⁵についても、定林寺や同じく扶余の軍守里廢寺等で確認されている。ただ、これらの特徴は百濟だけに限ったものではない。例えば高句麗清岩里廢寺(金剛寺)においては、八角基壇が二重基壇で、下成基壇に礎石を置いたものであることが報告されている¹⁶。この清岩里廢寺は、八角基壇の東西と北に建物基壇を伴うことから、一塔三金堂をもつ飛鳥寺の伽藍配置は、清岩里廢寺の影響を受けたと考えられているのである。

このような形で、わが国で最初の寺の造営工事が行われた後、あるいはその途中において、さらに寺の造営を望んだ者が少なからずあったものと考えられる。そのような際に造営技術者の調達はどのようにして行われたのであろうか。崇峻元年に渡来した工人は『日本書紀』や『元興寺資財帳』に記すところによれば、四種の技術、八名の技術者であった。この限られた技術者で寺の造営を行うことはできかねる面もあったろう。

崇峻元年に渡来してから、同三年に用材の調達が行われるまでには周到な準備が進められたであろう。その準備の中には、新たな技術者の養成も含まれていたことと思われる。たとえば、造瓦の面では須恵器作りの工人が動員されたことがすでに知られている。すなわち、瓦製作に使用された器具の中に、須恵器作りの際に用いられる青海波文の「当て道具」の痕跡が認められることからの見解なの

である¹⁷。造瓦部門でのみ技術者の養成が行われたのではなからう。他のあらゆる部門においてもわが国の工人達、とくに蘇我氏管下の工人達が百濟から渡来した技術者の指導のもとに、この寺の造営工事に動員されたものと考えられる。瓦にあらわれた技術者養成の痕跡は、他の部門でも同様のことが行われたことを示しているに過ぎない。このようにして、寺院造営に関する各分野の技術が、わが国の技術者達に伝えられたのである。

さて、飛鳥寺の造営に触発され、間もなくいくつかの寺々の造営が進められることになった。上宮王家による法隆寺(若草伽藍)と四天王寺、蘇我氏による豊浦寺、鞍作氏による坂田寺、秦氏による北野廃寺、高麗氏による高麗寺、玉井氏による船橋廃寺、桜井氏または穂積氏による新堂廃寺(烏含寺)等である。他にも飛鳥時代の瓦が出土する寺跡があり、七世紀前半に多くの寺々の建立のあったことが知られるが、ここにあげた寺々の出土瓦には、複数の寺との間で同范あるいはきわめてよく似た文様構成をもつ瓦が見られ、相互に何等かの関係をもっていたことが知られるのである。すなわち、飛鳥寺と若草伽藍との間、飛鳥寺・高麗寺・船橋廃寺との間、若草伽藍と四天王寺との間などでの同范関係、また飛鳥寺と新堂廃寺の間での文様構成の酷似などが認められる。

このような同范品の存在は製品の移動、瓦当范の移動、工人の移動などのあったことが考えられ、同系品の存在は複数の原図の移動、複数瓦当范の製作そしてその中の一部の移動、複数瓦当范による生産、そしてその中の特定の一部の移動の場合などが考えられる。もちろん、これは造瓦に関しての可能性であるが、造瓦以外の多くの場面でも同じようなことが行われたであろう。要するに造営技術の

移動があったわけである。いずれにせよ、飛鳥寺に次いで、大和では飛鳥と斑鳩で、山背では南山背と北山背で、そして河内で寺造りが行われたのであり、初期における寺院造営に際しては、技術者の相互の交流が無ければ実行不可能であった。

飛鳥寺に続いて飛鳥地方において造営された寺がどの寺であるのか、遺構の上からは定かではない。ただ、出土瓦から見た場合には坂田寺であろう。坂田寺跡の発掘調査は奈良国立文化財研究所によって、昭和四十七年度から八次にわたって行われている。しかし、寺としての遺構は第三次調査で見えられた金堂と考えられるのみである¹⁸。この遺構は、須弥壇位置の基壇内から出土した鎮壇具に含まれていた神功開寶によって、奈良時代後半以降の建造であることが明らかになった。七世紀前半の遺構として石積み溝が検出されているが、伽藍との関係は明確でない。しかし、さきにふれたように、六世紀末葉から七世紀初頭にかけての軒丸瓦が多量に出土しているの、いずれ何らかの遺構が見えることであろう。

寺院造営事業を可能とする豪族の多くは、中央政権と密着していた豪族であったと言っても過言ではなからう。したがって、七世紀代における寺院の造営は、その意図するところはきわめて政治性の高いものであった。その一つのあらわれとして、寺々の建てられた位置が飛鳥寺に見られるように、交通の要衝にあることをあげることができ。

大和において飛鳥地域に次いで寺院が造営されたのは、斑鳩地方であろう。おそらく法隆寺、中宮寺、平隆寺、法起寺の順であろう。そして若干時間において法輪寺が建立された。法隆寺がいつから存在したのか、史料によってそれぞれ異なり、創建の年は明かでない。

『日本書紀』では推古十四年七月の記事に、聖徳太子が、おそらく小墾田宮でのことと思われるが、天皇に請われて勝鬘経を講じ、さらに岡本宮で法華経を講じたことよって、播磨国の水田百町を賜りそれを斑鳩寺に納めたとあり、これが法隆寺に関する記事の初出である。この水田施入に関する記事は、『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』、『上宮聖徳法王帝説』、『上宮聖徳太子伝補闕記』などにも見えるが、それぞれその年が異なり、推古六年であったり、推古二十五年であったりする。また、水田の広さも五十万代などと膨大な広さの水田が施入されたことになっている史料もある。そのために、そのことに疑いをもつ見解もあるが、単に年次が正確に伝えられなかっただけで、経典を講じたことと水田の施入は事実であったとする見解も一方にある。²²⁾

法隆寺の創建年代に関して、常に取り上げられる史料として薬師如来光背銘がある。薬師如来完成の年が「丁卯年」すなわち推古十五年と記されている。²³⁾この年に対してもすでに古い時期に疑問ありとされており、近年でも決着がつかないようである。

法隆寺創建の場所は、いうまでもなく西院伽藍の東南、実相院と普門院の南側にあることが確認されており、そこが若草伽藍跡である。昭和十四年に行われた発掘調査によって塔・金堂が南北に置かれた伽藍配置であることが確認されたものである。また昭和四十三年に行われた発掘調査では、金堂の造営工事中に掘られた溝から、投棄された状態の軒瓦を含む瓦が出土し、創建時の瓦が明らかに変わった。軒丸瓦は単弁九弁蓮華文を、軒平瓦は手彫忍冬文を瓦当文様とするものであった。²⁴⁾従前から法隆寺創建時のものと考えられていた、四天王寺創建時のものと同範品は含まれていなかった。

この溝から出土した軒丸瓦の製作技法面からの観察で、これが、飛鳥寺の発掘調査で出土した単弁十一弁蓮華文軒丸瓦と、ほぼ同じ頃の製品であろうとの考え方を発表したことがあった。²⁵⁾その後、若草伽藍跡出土の単弁九弁蓮華文軒丸瓦は、飛鳥寺造営中に用いられた瓦当範の文様の一部を彫り加えて、若草伽藍の造営工事で用いられたことが明らかにされた。²⁶⁾飛鳥寺出土品の製作技法上は、さきあげた単弁十一弁蓮華文軒丸瓦と同じである。

このような状況から考えられることは、飛鳥寺の造営工事開始後ほどなくして若草伽藍すなわち法隆寺造営の計画が起り、飛鳥寺造営工房から瓦当範の一個が運ばれたということである。その際、飛鳥寺の製品との区別の必要から、瓦当範の一部を彫り加えたものと考えられる。²⁷⁾そして、その瓦の年代観から、七世紀の早い頃には法隆寺の造営工事が開始されたと考えられるのである。しかし、聖徳太子の意志によって工事が始められた、斑鳩宮造営の年(推古九年)をさかのぼることはなからうと考えられる。

次に斑鳩地域で営まれた寺は中宮寺であろう。中宮寺跡においては、昭和三十八年に石田茂作氏によって発掘調査が行われた。現地には東西約二十メートル、南北約三十六メートルの南北に長い土壇が残っていたが、調査の結果、南北二つの建物基壇であったことが明らかにされた。すなわち、南に塔を、北に金堂を配置するものであった。²⁸⁾ここで注目すべきは、創建時の軒丸瓦が百済系と高句麗系の両者が用いられていることである。そしてこの両者は、寺跡の西方約四キロメートルの位置に営まれた平隆寺創建時のものと同範品であり、平隆寺の北方の丘陵に築かれた今池瓦窯から供給されたものであることが明らかにされている。

平隆寺は、昭和四十九年に橿原考古学研究所によって発掘調査が行われ、塔跡が確認されている。²⁹そして、塔心礎を据えるための導入坑の中に、飛鳥時代の瓦を敷いた「瓦敷き遺構」があつて、塔建立以前に金堂が建てられた可能性が述べられているが、その遺構は確認されていない。しかしながら、塔跡の位置は現地地形から想定される推定地域の南北中心線上にあり、しかも、南辺から三分の一のところにくる。このようなことから、四天王寺式伽藍配置の可能性が考えられている。寺域内出土の最古の軒丸瓦は、中宮寺との同范品、すなわち今池瓦窯から供給された百済系と高句麗系の二型式である。中宮寺と平隆寺の供給に関して、どちらが先行したのか、定かではないが、中宮寺出土例は瓦当文様が鮮明のように見受けられる。

法隆寺は飛鳥寺に引き続いて造営されたものと考えられるが、斑鳩の地は中小の河川が合流して大河川となるあたりの右岸にある。すなわちこの地は、佐保川、初瀬川の水を集めた大和川が、さらに寺川、飛鳥川、曾我川、高田川などと合流し、最後に富雄川と合流して大河川として流れはじめる所にある。河内・摂津をつなぐ重要な交通路である。まさに水路の要衝である。そのような地であつたからこそ、聖徳太子によって斑鳩宮が営まれ、法隆寺をはじめとする中宮寺、平隆寺、法起寺などが次々と建立され、斑鳩文化圏を構成することとなつたものと考えられる。

大和川を挟んだ斑鳩側には風の神を祭る龍田神社が鎮座し、対岸の川合の地には水の神を祭る広瀬神社が鎮座する。『日本書紀』に記されているように、両社とも天武四年(六七六)以降、朝廷が祭祀に関わりをもつようになった。天智九年(六九〇)、に法隆寺が焼亡した際、上宮王家がすでに滅亡しているにもかかわらず法隆寺が再興

された。このことは、とりもなおさず朝廷がこの地を重視していたあらわれといえよう。

飛鳥・斑鳩以外の地域で造営された初期寺院は大和盆地の東辺、春日山麓に営まれたいくつかの寺々であろう。それらは横井廃寺や古市廃寺などであり、七世紀前半の軒丸瓦が出土している。この両寺とも発掘調査が行われ、四天王寺式伽藍配置の寺であることが報告されている。³⁰

同じ上宮王家によって建立された四天王寺は、摂津初の寺院であつた。四天王寺創建の年に関しては、『日本書紀』の崇峻天皇即位前紀に「乱を平ぎて後、摂津国に四天王寺を造る」とあり、さらに推古元年(五九三)九月紀に「是歳、始めて四天王寺を難波荒陵に造る」とみえる。『日本書紀』での記事の重複は、飛鳥寺を意識しての事であろうと考えられている。

昭和三十年から文化財保護委員会によって四天王寺復興に関わる発掘調査が行われた。³¹この調査によって、四天王寺の造営工事がかなり長期にわたり、途中での設計変更のあつたことが各所で確認された。寺域内で出土する最古の軒丸瓦は、若草伽藍との同范品、単弁八弁蓮華文を瓦当文様とするものである。出土資料はいずれも瓦当面に範傷をとどめるものであり、同范品は若草伽藍への供給が先行した。ここで明らかなのは、政権中枢部での寺院造営工事が飛鳥寺、法隆寺、四天王寺の順序だったということであり、四天王寺が飛鳥寺に先行するものでもなく、飛鳥寺と並行するものでもないことである。ただし、その時間的な差はさほどなからうと考えられる。

さて、四天王寺建立の地に関しては、『上宮聖徳太子伝補闕記』には物部守屋滅亡後の記事に「玉造の東岸上に営み、四天王寺とす。

(中略)後に荒墓村に遷す」とある。³²このように、創立の年だけでなくその場所も明確ではない。現在四天王寺の建つところは両史料にいう荒陵(墓)の地に相当する。当初玉造の東岸上に建てられたのかどうか、発掘調査で確認されたわけではないが、難波宮下層遺跡から四天王寺の創建寺の瓦が出土しており、注目されている。³³仮りに玉造で創建され、後に荒陵に遷されたとしたならば、それなりの理由があるはずである。また、そうでないとしても史料にこのような記述が見られることは、その当時の玉造の地に対する何らかの意識が働いていたものと考えられる。

玉造の地は上町台地に含まれており、後に難波宮が営まれた所である。ここは大和と摂津とを結ぶ暗越奈良街道の摂津側の起点である。そして、ここから二・五から三キロほど南にある荒陵の地は、やはり大和へ通ずる亀の瀬越道の起点である。法隆寺も四天王寺も上宮王家の寺であるという観点からすれば、両寺を結ぶには、暗越道より亀の瀬越道をとるのがより便利である。そのことを四天王寺を玉造から荒陵へ遷した理由の一つとしてあげることができよう。いずれにせよ、二つの土地は交通の要衝にある。

船橋廃寺は亀瀬越道と東高野街道とが交差する地域にある。³⁴七世紀のごく早い時期にこうした位置に寺が営まれたということは、逆に言うところの地域を朝廷が重要視していたことを示すものである。推古二十一年十一月紀に見える「難波より京に至る大道を置く」の記事は、藤原京北方を東西に走る横大路のことと考えられており、亀瀬越道と東高野街道がこれに連なるところからも、この地域が要衝の地であったことが知られる。

船橋廃寺と相前後して造営された新堂廃寺は東高野街道と富田林

街道が交差する地域にあり、ここは大和と直接つながる竹の内に向かう地域であり、このような地域を擁する豪族であったからこそ、寺院造営という大事業を興すことが出来たのである。³⁵

山背においては、北端の愛宕郡に北野廃寺が、南端の相楽郡に高麗寺が営まれた。いずれも要衝の地である。北野廃寺は昭和四十年に行われた発掘調査で、初めて瓦積み基壇の一部が検出された程度である。³⁶しかし、七世紀初頭の軒丸瓦が若手ながら出土しているのも、山背として初期の段階に造営工事が行われたことは疑いない。

高麗寺跡の発掘調査は、すでに昭和十年代に行われており、塔・金堂を東西に置いた伽藍配置であることが確認された。³⁷その後昭和五十九年から寺跡の確認調査が山城町教育委員会によって行われ、³⁸北面回廊が講堂の東西妻にとりつくこと、寺域が東西六四〇尺(約一九〇m)、南北六〇〇尺(一七八m)に近い規模になることなどが明らかにされた。また、飛鳥寺創建時の軒丸瓦との同范品が、発掘調査で出土した軒丸瓦総量の一・五パーセントにも満たないこと、僅かな出土例にもかかわらず、技法的に時期差が見られることなどから、それらの瓦は寺が本格的に造営整備される以前に使用されたもの、すなわち前期高麗寺所用品との見解が示されている。そして伽藍の本格的整備は七世紀後半、六七〇年前後に開始され、遅くとも七世紀末葉に終了したものと考えられている。

南山背においては、三山木廃寺や普賢寺跡から古式の軒丸瓦が出土している。したがって、この地域として初期の段階に造寺行為があったものと考えられるが、残念ながら寺としての明確な遺構は発見されていない。

以上のように、初期寺院は交通の要衝に営まれている。交通の要

衝に位置する豪族は、それなりの力量をもっていたからこそ、その地域が交通の要衝となったという面もまたあろう。あるいは交通の要衝に位置したことによって力を蓄えることができたとも言えよう。交通路を掌握することが政権保有者の絶対条件であることからすれば、その地域の豪族との関係を密接に保つために技術援助を行い、寺の造営を進めさせたことは、当然の結果であらう。寺院造営事業、とりわけ初期の段階においては、寺院造営を欲する側と、それを援助する側とのバランスの上に成り立っていたと言えよう。では、政治的なつながりを保つ手段が何故寺でなければならなかったのだろうか。

四 寺院造営の背景

古代における寺には、いくつかの性格が含まれている。一つはよく言われるように、権威の象徴としての建造物である。前代の古墳に代わっての意味合いなのであり、確かにかつて見たこともない巨大建築の出現は、その地域における豪族の権威を高からしめたであらう。これは視覚的な面と、寺院造営に至る過程を含め、寺院そのものに内包される、異質な文化に対する畏敬の念である。寺院の完成によって、その思いはさらに高まったであらうし、時あるごとに執り行われる法会の際の読経には、その内容の理解はともかくとして、従来の神祭りと異なった祭りの形、そしてそこに祭られた金銅仏の姿は、人々を神秘の世界に導いたことであらう。

次によく言われるのは、防衛施設としての性格である。版築で築き上げられた高さ五メートルほどの堅固な大垣に囲まれた寺は、そ

の外側に大溝をめぐらしてもおり、従来見られなかった防衛の施設として活用できたにちがいない。

寺以外の防衛施設がどのようなものであったのか定かでないが、各地で発見されている、豪族の館の周囲をめぐらせた大溝のようなものであったとも思われる。史料の上では、『日本書紀』皇極三年十一月の記事に、「蘇我入鹿が新たに建てた家は「城柵を作り、門の傍に兵庫を作」ったとあり、柵をめぐらせたものであったことが知られる。文脈からは、かなり堅固なものであるよううかがえる。このように柵をめぐらせたものは、その規模は詳かでないが、倉梯柴垣宮（崇峻天皇）や泊瀬柴籬宮（欽明天皇）などの、宮号にも見られるところである。また、実戦での防衛施設としては、崇峻天皇即位前紀に見える、蘇我・物部の戦いの際に、河内波川において「稲城を築きて戦う」とある。これは稲藁を積み上げて矢を防いだものであつたらう。そのような点からすれば、寺の大垣は強力な防衛施設と言えよう。皇極二年（六四三）十一月、蘇我氏が差し向けた軍勢に襲われた山背大兄王一族が斑鳩寺に入った例、あるいは同四年六月の乙巳のクーデターの際に、蘇我入鹿を誅滅した中大兄皇子が飛鳥寺に立てこもった例、また大化五年（六四九）三月、軍勢に襲われた倉山田石川麻呂一族が山田寺に入ったことがよく取り上げられるように、寺にはこうした一面もあつた。

三つめは、新たな文化の受け皿ということである。仏教は中国大陸や朝鮮半島だけでなく、広く東アジア地域における有形無形の文化を含んでいた。広い分野にわたる技術が寺院造営技術に伴ってもたらされた。当然のことながら、高度な内容をもつ仏教の教義が伴っていた。これらと共に、一見、直接仏教に関わりをもたないよう

なものも含まれていた。しかし、そのような幅広い新しい文化が古代国家の体質改善に役立つことになったのである。

以上のような性格を寺院、とりわけ初期寺院はもっていたのである。それらの寺院造営者をもう一度概観してみると、飛鳥寺の直接造営者は蘇我氏である。蘇我氏はさきにもふれたように、古くから帰化人と密接な関係を保ち、国際的感覚をそなえていた。若草伽藍・四天王寺建立の上宮王家、聖徳太子は母方が蘇我に連なり、知識を広く外に求めた。また、皇太子として政権の中枢部に居た。寺は上宮王家の建立ではあるが、官の寺に等しいものということができよう。高麗寺建立の高麗氏は高句麗系氏族であり、北野麁寺建立の秦氏は祖先が応神朝に朝鮮半島から渡来したが、秦始皇帝の末裔と称する氏族である。新堂麁寺を建立した氏族が桜井氏であったとすれば、桜井氏はその出自が蘇我石河宿祢と伝えるので、帰化人と密接な関連がある。また、その造営者が錦織氏であった場合、この寺が営まれた錦織郡は余部・百済の二郷から成り立っており、百済の影響が強い地域である。このように、寺造りを進めた者は何らかの形で中国大陸や朝鮮半島との接触をもっている。中央政権が、仏教を取り入れることによって新たな体制を整えようと考えたとしても、実際にそれを受容するだけの知識がなければ、その活用は出来得まい。したがって、帰化系、あるいはそれと密接な関係をもっていた豪族が仏教寺院をまず建立することが出来たのである。

最初に飛鳥寺に居住した僧侶が、高句麗から渡来した惠慈と百済から渡来した慧聡の二人であったことにふれるまでもなく、そのような僧侶の援けがなければ寺の運営は不可能であった。そしてわが国に仏教の教理を広めるため、あるいは広い範囲での新たな文化を

導入するために中国大陸に派遣された初期の僧侶・学生が帰化系の人々であったことは、基礎知識を身につけている者が帰化系の子弟に限られていたことを示している。すなわち、『日本書紀』推古十七年に記す、隋に派遣された人々の名を見ても明らかである。朝廷のこのような施策に対して、派遣された僧侶・学生もそれに応えるべく研鑽を積んだ様子がうかがえる。そのことは推古二十一年(六二三)、帰朝した惠日等の奏聞「唐国に留れる学者、皆学びて業を成せり。応に喚すべし。且つ其れ大唐国は法式備り定りて珍しきになり。常に須らく達うべし」によく表れている。

わが国初期寺院の造営にあたっては、背景に国家として新たな体制を造り上げていこうという、壮大な目的があった。ただ、その構想に中国の諸制度に倣うという漠然としたものがあるだけで、具体的なイメージとして把えられていたものでもなく、その手段も手探りの状況であった。したがって、仏教そのものを理解できない氏族はそのことに参画できないのであり、寺院造営者が帰化系氏族に偏ったのは当然のことであった。

当時のわが国をとりまく状況には、きわめて複雑なものがあった。朝鮮半島では、高句麗、百済、新羅それぞれの抗争があり、中国大陸の動きがそれをさらに複雑なものにしていた。自らの立場が不利なものと感じていた百済は、わが国に近づくことを考え、その手段の一つとして仏教を伝えた。そのことよってわが国にも混乱が生じはじめ、蘇我氏と物部氏との戦いを経て仏教寺院の建立に至ったのである。それに至るまでに、五十年という歳月を必要とした。寺院の造営事業が本格的に始められたことによる、わが国の文化向上には著しいものがあった。古代史上画期的なことと言わざるを得ない。

五 朝廷の仏教受容

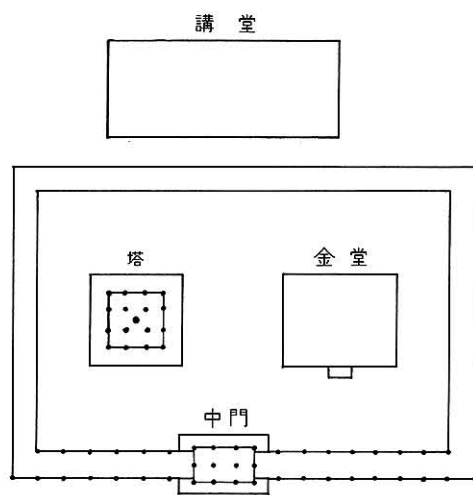
朝廷が仏教を正式に受容したのがいつなのか、明らかではない。少なくとも推古朝にはまだ受け入れてはいない。仏教が伝えられて数十年経過し、寺の数も増えてくるにしたがって、いろいろな変化が生じていることが分かる。そうした中で、比較的大きな変化が認められるのが伽藍配置である。

初期寺院の伽藍配置は、基本的には塔と金堂を南北に配置する四天王寺式である。⁴⁰ わが国で最初の造営された飛鳥寺の伽藍配置が一塔二金堂式という形でありながら、その後には営まれた寺々が四天王寺式であることに對しては、いくつかの考え方があつた。まず、飛鳥寺の伽藍配置から東西両金堂を省いた形で若草伽藍や四天王寺が建てられたという考え方があつた。次に飛鳥寺の伽藍配置は高句麗のそれに倣つたもの、すなわち現在の平壤郊外に営まれた清岩里廃寺のような形が採用され、四天王寺式は若草伽藍や四天王寺が造営された時に、百済に多く見られる形が採用されたという考え方があつた。いずれにせよ、七世紀前半に営まれ寺々は、塔・金堂が南北に配置された形態であつた。

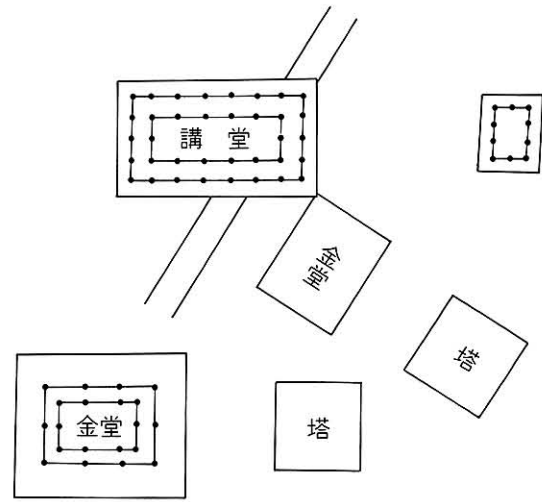
ところが、七世紀のある時期に塔・金堂が東西に配置される形が採用された。その時期はいつなのか。その理由は何なのか。こうした変化に對する考え方もいくつかあつたが、これはわが国初期寺院造営の中でも大きな変化と言わねばならない。この伽藍配置が東西並列といつても、塔が金堂の西に置かれるものと、東に置かれるものとの二種があり、それぞれに意義が求められるかも知れないが、こ

こでは、塔・金堂が南北に置かれたものが、東西配置に変化したという点に注目しておく。

このような伽藍配置をもつ寺は全国的に数多く見受けられるが、奈良興法輪寺が現在のところ年代をおさえることができるものとして、比較的古い頃におくことができる。法輪寺境内では昭和二十五年に発掘調査が行われ、回廊内の東に金堂を、西に塔を置いて、北面回廊が金堂と塔の背面で閉じる形であることが確認されている。⁴¹ 講堂はその北に置かれる。また、昭和四十七年に塔跡の発掘調査が行われ、基壇掘込み地業版築から軒丸瓦が出土し、その種類以外にこれをさかのぼる軒丸瓦は寺域内から出土していない。このことから、塔造営中に、金堂ですでに使用した軒丸瓦が版築工事中にまぎれこんだと考えられている。その軒丸瓦の年代は六五〇年を前後する頃におくことができる。ただし塔の年代は、様式的に天智九年(六七〇)以降に再建された法隆寺の五重塔をさかのぼり得ない事が明ら



法輪寺伽藍配置図 (1:1,000)



穴太廃寺伽藍配置図 (1:1,000)

かにされているので、創建期にこのような伽藍配置の計画があったと考えられるのである。

法輪寺の他に金堂・塔を東西に置く形は、奈良県の巨勢寺・長林寺・安倍寺がある。いずれも発掘調査が行われており、当初から金堂・塔を東西に配置したものであることが明らかになっている。それぞれの寺で使われた創建時の軒丸瓦は、法輪寺と同じ時期、あるいはそれに前後する時期におくことができる。

滋賀県穴太廃寺の創建伽藍については若干の疑問点があるが、伽藍に向かって塔を右に、金堂を左に置いた配置である⁽⁴³⁾。穴太廃寺の創建伽藍は、造営方位が南北をとっていない。おそらく、造営当時のこの地域の地割りに一致しているのであろう。しかしここでは、文章表現として塔を東、金堂を西とする。再建された伽藍の方位は、大津宮地域で検出されている建物方位に一致している。この穴太廃

寺創建伽藍に対する疑問点は、金堂が南北棟で建てられていることである。塔の西に南北棟の建物をもつ寺としては、奈良県川原寺、福岡県観世音寺、宮城県多賀城廃寺がある。これら三か寺とも七世紀後半以降の造営になるものであり、穴太廃寺とは年代が離れすぎている。というのは、穴太廃寺からは七世紀前半の軒丸瓦が出土しており、この瓦と胎土・焼成が近似する瓦に文字をもつものが二点ある。それらは「庚寅年」「壬辰年六月」であり、前者は六三〇年に、後者は六三二年にあてられている。この段階に塔・金堂を東西に配置する寺が建てられたという点に疑問を抱くのである。

いずれにせよ、七世紀前半代に塔・金堂を東西に置く伽藍が生み出された。塔・金堂東西配置で確実な寺が法輪寺であるところから、仮に、法輪寺造営に近い頃にそのような伽藍配置が生み出されたとしたならば、当時の仏教に関わる状況を概観する必要がある。推古朝に至っても、朝廷が正式に仏教を受容する事ができなかったとは言え、別表に示したように、仏教に関わる記事が『日本書紀』には数多く見られる。すでに仏教の浸透は著しく、仏教抜きにしての政治は成り立たない状況であったといえよう。むしろ、仏教界に対する統制の動きも見られるのである。

そのような状況にあった推古三十一年、恵日らが帰国しての中国の状況報告は、朝廷に大きな衝撃を与えたに違いない。恵日らの報告でとくに重要な箇所は、「其れ大唐国は、法式の備わり定れる珍しき国なり、常に須らく達うべし」であった⁽⁴⁴⁾。隋を滅ぼして成立した唐は律令を完備させ、それにもとづいての行政体制が整えられていた。それにひきかえ、わが国の状況はきわめて後れた体制であることを恵日らが痛感したのであった。しかも彼らは、隋の時代に派遣

推古紀仏教関係略年表

推古元年	是の歳四天王寺を難波荒陵に造る
2年2月	皇太子と大臣に詔して三宝を興隆させる 各豪族が競って寺造りを始める
3年5月	高句麗僧恵慈渡来、皇太子師とする 是の歳百濟僧慧聰渡来する
4年11月	蘇我善徳を法興寺の寺司とする
10年10月	百濟僧觀勒渡来する
閏10月	高句麗僧僧隆・雲聰渡来する
11年11月	皇太子所持の仏像を秦造河勝が受け、蜂岡寺を造る
14年7月	皇太子勝鬘経を講説する 是の年皇太子法華経を岡本宮で講説する
17年4月	百濟僧道欣・恵弥等渡来する
5月	百濟僧等を法興寺に住まわす
18年3月	高句麗僧曇徴・法定渡来する
23年11月	高句麗僧恵慈帰国する
24年7月	新羅から仏像伝えられる
31年7月	新羅・任那から仏像・金塔・舍利・灌頂幡・小幡等伝えられる 仏像を秦寺に、他を四天王寺に入れる 留学僧恵日等帰国する
32年4月	僧某斧で祖父を毆る 觀勒を僧正、鞍部穗積を僧都、阿曇連を法頭に任ず
9月	各寺の縁起、僧尼得度の年月日等を録せしむ この時寺46、僧816、尼569
33年1月	高句麗僧恵灌渡来する。僧正に任ず

(『日本書紀』による)

され、唐の成立に至る大革命を目のあたりにしてきた。その新しい国家の中で一時期を過ごし、強力な力に脅威を感じたに違いない。したがって、唐と常に交流し新たな文化を摂取する必要性を説き、わが国の近代化を進めるために、留学僧・留学生の帰国を促しているのである。

その七年後、舒明二年(六三〇)に第一回遣唐使として犬上三田相が派遣された。これに恵日に加わっていることは、さきの推古三十一年の奏上の結果であることが明らかである。朝廷はその間、いろいろな情報をもとに唐の状況に検討を加えていたに違いない。そして舒明朝に至って、唐に遣使して直接その国情を知ろうとしたのであろう。恵日が遣唐使の一員として加わっている意義がここにある。その二年後の舒明四年、遣唐使が帰国した。唐からは犬上三田相を

送る形で、高表仁が遣わされてきた。彼らが難波津に到着した時の歓迎ぶりは盛大なものであった。また、その時何人かの留学僧・留学生が共に帰国した。朝廷の彼らに期待するところは大きかったであらう。

このようにして、新たな文化を受け入れる体制を整えつつあったが、当然のことながら、新たな文化の中には、唐における仏教に関わる事柄も含まれていたものと考えられる。そこに、舒明十一年(六三九)に大寺の造営が計画されたことに、注目しなければならぬ理由が存在するのである。仏教が伝えられて以来、朝廷が正式に仏教受容を宣言した史料は見られない。たとえば推古三十二年四月、一法師が祖父を斧で毆つたことをきっかけに、詔によって僧正・僧頭・法頭の任命という政策的なことがあったにせよ、『日本書紀』にも朝

延による仏教受容宣言の記事は見られない。推古二年二月紀の皇太子と大臣に詔して三宝を興隆せしめたことは、一見朝廷による仏教受容を示しているかのようだが、しかしながら、この詔は直接に天下諸国に発せられたものではなく、皇太子と大臣に対してである。試みに仏法興隆をはからせたように感じられる。『上宮聖徳法王帝説』には、推古十三年に聖徳太子と蘇我馬子が相謀って仏教を興隆したとある。そのような伝えが、詔として発せられた形になつたのではなからうか。しかし、舒明十一年の大寺造営の計画は、明らかに、朝廷に仏教がすでに入っていることを示している。翌舒明十二年五月紀には無量寿経の講説が行われたことが記されている。文脈からは、それが宮廷で行われたようだが、この記事については、白雉三年(六五二)四月紀の記事の重複かとも考えられるが、いずれにせよ、仏教がすでに朝廷に入っていたことを示すものであろう。

以上のような、唐の文化の積極的な摂取という点から考えられることは、新たな寺造りに際して、従来の朝鮮半島の百濟・高句麗に見られなかった、唐の影響下での、塔・金堂東西並立という伽藍配置が、この時生み出されたものと考えられるのである。百濟大寺造営にあつたのは、書直縣であり、「大匠」に任せられた。大匠は唐の造営制度に見られる名称であり、後に白雉元年十月に官の掾を示す標を立てた荒田井直比羅夫が将作大匠であつたが、これと同じ性格のものと考えられる。唐の造営機構は将作監であり、その中大匠が置かれていた。⁴⁵⁾

以上のように、朝廷が仏教受容を決断するには、唐の影響が大きかつたと考えるのであるが、それでもなお、仏教受容について揺れ

動いていた様子を窺うことができる。この時建立の大寺についての実体は定かでないが、大安寺前身の百濟大寺である。この寺について『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』では、寺が「子部社を切り排いて」建てられたため、社神の怨によって焼亡してしまったとある。⁴⁶⁾ 焼亡の時期は明らかでないが、舒明天皇が崩ずる直前にこの寺の復興を皇后に遺勅したとあるので、建立後間もなくのことである。

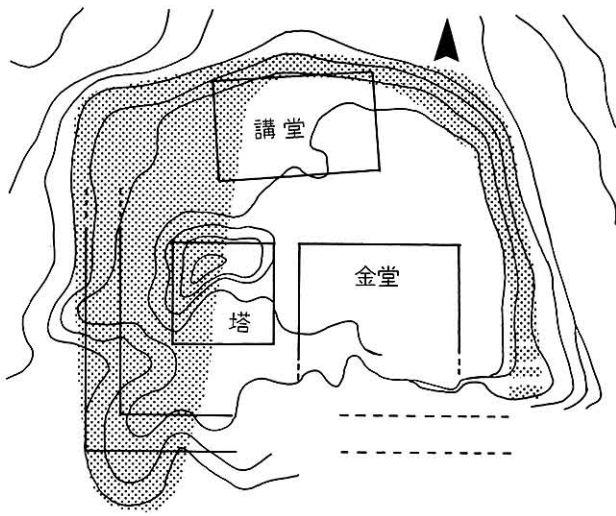
この寺の焼亡の理由が子部社の怨によつたということは、朝廷に対する神の比重がまだ大きかつたことを示している。皇極元年(六四二)七月紀と八月紀に祈雨の記事が見える。七月には、蘇我馬子が大寺の南庭に衆僧を集めて、大雲経を讀ましめ雨を祈っている。結果は「微雨」とある。八月には、天皇が南淵の川上で、四方の神を拝み雨を祈る。結果は「大雨」で「天下を潤す」とある。舒明・皇極朝は仏教を正式に受容したといつても、在来神と仏教との統一ができなかつたことを示している。⁴⁷⁾

『日本書紀』には百濟大寺の焼亡の記事は見えないが、皇極元年九月紀に天皇自ら大寺造営の計画を大臣蘇我馬子に図っている。この記事の割註に寺は「百濟大寺」であることが記されている。とすると、これは焼亡した百濟大寺の復興の計画であろう。では、同年七月紀にある祈雨の場の大寺は、その時どのような状況だったのであろうか。菩薩と四天王を安置して大雲経を讀ましめたのが、大寺の南の庭であつたことに注目しなければならぬのかも知れない。

六 堂塔造営の順序

寺の造営にあつて、まず整地工事が行われることは山田寺跡の

調査でも明らかにされた。⁴⁸ここでは、中心伽藍の東の谷を埋めるといふ、大規模な工事が行われている。東回廊倒壊の位置がちょうどそこにあたっていたため、湿気に保護されて回廊の軸部が遺存したことがよく知られている。また、法隆寺西院伽藍の造営に際しても東面回廊の東、西面回廊の西ともに谷筋を埋めていたことが明らかになった。⁴⁹河内新堂廃寺の場合、中心伽藍地域の南北約八十メートルの範囲は北から南に傾斜する地形であり、その高低差は約一・五メートルである。そのため、南部を埋め立てて平坦地を造成し、堂塔を建てていた。⁵⁰和泉海会寺跡においては、伽藍中央部予定地の東西・南北それぞれ五十五メートルの範囲の高まりを削り、周囲の低い土地を埋めていた。⁵¹しかし、必要とする土量に満たないため、不足分が他地域から運ばれている。塔の西方では厚さ二メートルに及



海会寺跡中央区の整地の範囲（註51から作図）

ぶ埋め立ても行われている。川原寺の造営に際しては、斉明天皇の川原宮の一部と見られる、石組みの溝を含んだ湿地を埋め立てている。⁵²

このように、伽藍の造営にあたっては大規模な整地工事が行われた。それは、広範囲にわたって平坦な土地を確保する必要があったからである。そのような工事が行われた後の堂塔の建立にあたっては、金堂と塔のいずれの造営工事が先行するのであろうか。

若草伽藍で行われた、昭和四十三年の発掘調査においては、金堂の工事が行われた後に、塔の工事にとりかかったことが確認されている。⁵³すなわち、金堂基壇は掘込み地業によって行われ、版築の築土が旧地表面で掘込み地業の外にはみだしている。旧地表の上、僅かなところで後世の削平を受けているので、どの程度築いた上で盛土整地が行われたのか定かでないが、金堂基壇の南を盛土整地している。これは、若草伽藍造営地が北から南へ傾斜している地形のためである。この整地は、掘込み地業の外にはみ出した基壇築土を覆って行われている。そして、その整地土を掘り込んで塔の基壇の地業が行われている。時間的な差がどの程度あったのか、この地業の差ではわからないが、金堂の工事が先行し、その後に塔の工事が行われたことが明らかである。

法輪寺においては、さきに述べたように昭和二十五年に石田茂作氏による発掘調査が行われ、法隆寺式伽藍配置であることが明らかにされた。建て替えなどの痕跡はなく、堂塔の配置は当初からのものであり、その後昭和四十七年に行われた三重塔再興工事に伴う塔跡の発掘調査では、基壇の周辺から法隆寺式軒瓦が出土し、塔基壇の版築土からはこれより古い型式の単弁蓮華文軒丸瓦が出土し、塔

に先行する建物存在の可能性が考えられた。寺域内から出土する軒瓦で最古のものは、その、塔基壇内出土の型式のものであり、その軒丸瓦が塔以外で使用されたとなれば、それは金堂以外には考えられない。したがって、法輪寺においても金堂が先に建立されたと考えてよい。

海会寺において、堂塔建立に先だって大規模な整地工事が行われたことは先に述べたとおりである。調査の所見では、西方の整地土は大きく上下二層に分かれ、下層にはI A型式軒丸瓦、I 型式丸瓦・平瓦の破片が含まれている。上層にはI B型式・II A型式軒丸瓦、II 型式平瓦が含まれている。そしてこの上下両層に間層があることから、整地工事に時間的な幅があったと考えられている。塔は、上層の整地工事後に造営されている。したがって、金堂建立工事が始められた後のある時期に塔建立の工事が行われたことが明らかである。発掘調査での軒丸瓦の出土状況を見ると、金堂が一部しか調査できなかったとは言え、明確に金堂に伴うことが明らかな地点からはI Aのみが出土し、塔側からはI Aが若干混じり、I B・II Aが圧倒的な量で出土したデータが示されている⁵⁴。これは、軒瓦の出土状況、その分布状況からも堂塔の建立順序を推測できる好例である。

次に、史料の面から見てみよう。わが国で最初に造営された飛鳥寺は、第三節で述べたように『日本書紀』に詳しく記されている。すなわち、崇峻五年（五九二）に金堂と回廊の工事が行われ、推古元年に塔の心柱が立てられている。これはその年の正月の記事であるので、前年に開始された金堂と回廊の工事後、程なくして掘込み地業などの基礎工事が始められていた可能性もある。

山田寺の場合、『上宮聖徳法王帝説』の「裏書」によってきわめて明解である。舒明十三年（六四一）に整地工事が行われ、皇極二年（六四三）に金堂の工事が行われた。大化四年（六四八）に僧を住まわせたのである。僧房の工事は並行して進められていたのである。そして天智二年（六六三）に塔の工事が行われ、天武二年（六七三）に塔の心柱が立てられ、それにあたって舍利及び莊嚴具が心礎の舍利孔に納められた。これによって、金堂の工事が先行し、二十年を経てから塔の工事が始められたことが知られるのであるが、これは周知のように、檀越である蘇我倉山田石川麻呂の冤罪事件があったからである。その事件に関する『日本書紀』大化五年三月紀の記事の中に、「（前略）大臣の長子の興志、是より先に倭に在りて、山田の家に在るを謂う。其の寺を営造る（以下略）」とあり、難波から逃げてきた父石川麻呂たちを寺に入れるのである。これらの内容から察せられることは、金堂と寺域を囲む大垣は完成しており、迫り来る軍勢をある程度防ぐことが出来たであろうということと、興志が「営造」していたのは塔ではなかったかということである。ところが、石川麻呂の冤罪事件があつて、一族滅びたために、この寺の造営工事が一時停止され、再び始められたのが天智二年ということだったと考えられるのである。

「法起寺塔露盤銘」⁵⁵によると、舒明十年（六三八）福亮僧正によって弥勒像と金堂が造られ、天武十三年（六八五）に惠施僧正によって堂塔の整備または塔建立の工事が始められ、慶雲三年（七〇六）に塔の露盤が上げられたとある。造営期間がきわめて長期にわたっている。舒明十年に金堂の工事が始められながら、その五年後に山背大兄王一族が蘇我氏の差し向けた軍勢によって滅ぼされた事件のため

に工事が中断し、再開されたのが天武十三年のことと解釈されるのである。いずれにせよ、法起寺においても伽藍の工事は金堂から始められている。

以上のように遺構の上から、あるいは史料から見ると、初期寺院の造営時には金堂の工事が先行し、塔は次の段階で行われていることが明らかである。寺の本来の姿を考えれば、釈迦の舍利を祭る施設であったはずである。ところが、初期のわが国においては、金堂が重視されていたことがわかるのである。それはわが国への仏教の伝えられ方によるものと考えられる。欽明十三年に百済から仏教が伝えられたことを記す『日本書紀』の記事にも、『元興寺資財帳』の記録にも、舍利がもたらされたことは記されておらず、経典と仏像が伝えられたことを記している。『日本書紀』ではその時の天皇について、このような教えをかつて耳にしたことがないと言ったことと、仏像を目にして大いに喜んだことを記している。そして、その仏像を祭るために蘇我稲目が仏堂を建て、という流れである。崇峻元年に百済から工人たちが渡来したときには、舍利がもたらされているのであるが、『元興寺資財帳』には、その時に「金堂ノ本様」が持ち込まれたことが記されている。たまたま金堂ノ本様のことが記されたのかも知れないが、金堂が重視されたことを示すものと言えよう。このような背景があったために、寺院造営の初期の段階においては、金堂がまず建立されたのであろう。

七 瓦当文様に見る朝鮮半島の要素

仏教が伝えられ、寺造りの工人たちが百済から派遣されてきたこ

とからすれば、飛鳥寺創建時の瓦当文様に百済の要素が濃く見られることは当然である。そうした技術の広がりを見せるかのようには、同系統のものが坂田寺・横井廃寺・海龍王寺・姫寺廃寺・高麗寺・北野廃寺・船橋廃寺など何か所かに見られる。ただし、これらのすべてが七世紀初頭造営にかかわるものとは限らない。

また一方、高句麗系に属する瓦当文様をもつ軒丸瓦も、初期寺院に見られる。その代表例として常に取り上げられるものは、豊浦寺跡と北野廃寺である。このうち、北野廃寺においては百済系軒丸瓦と共用され、しかも幡枝瓦窯で両者が生産されたことも明らかにされてお⁵⁶り、さらに高句麗系の同范品が宇治市隼上り瓦窯で生産され、それは豊浦寺へ供給されたことも明らかに⁵⁷されている。百済系軒丸瓦と高句麗系軒丸瓦が同時に使用された例として、さきにあげた中宮寺と平隆寺の創建時のものがあり、これは今池瓦窯生産の同范品である。

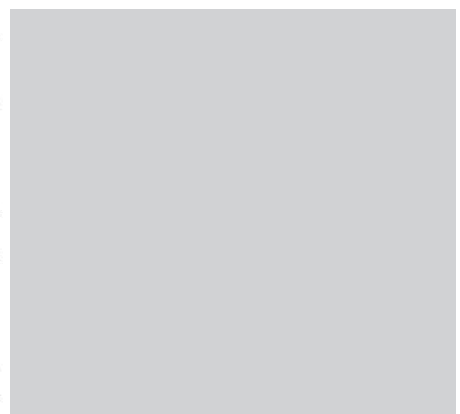
このように、瓦当文様にはわが国での寺造りの初期の段階から百済と高句麗の要素が見られるのである。では、新羅の要素はどうであろうか。七世紀前半での新羅の要素ということになれば統一前の新羅、いわゆる古新羅である。統一新羅の瓦当文様については、しばしばとりあげられる。しかし新羅との交流は、古新羅時代から行われているのであり、何らかの影響が見られるはずなのである。そのような意味から、わが国の瓦当文様にその影響がみられることについて、別稿で述べたことがある⁵⁸。その後、新たに良好な資料の出土を見ているので、ここでも若干述べておこう。別稿で、軒丸瓦に見られる古新羅の要素としてあげた条件は、単弁六弁の蓮華文を飾る、幅広い蓮弁の中央に縦に一本の凸線を入れる、蓮弁内にパルメ

ットを入れる、中房が大きい、中房を放射状にいくつかに分割する、中房の周囲に沈線をめぐらす、弁区と外縁との間が離れている、外縁が幅広く高いなどである。

古新羅自体、百済と高句麗から強い影響を受けているので、瓦当文様には両者の影響が現れているのであるが、それらが混交して古新羅特有の瓦当文様が成立している。ここであげた特徴のすべてをそなえた瓦当文様が、わが国の初期のものに数多く見られるわけではない。しかし百済系、高句麗系のどちらにもあてはまらず、むしろ古新羅の文様構成に近いものが、七世紀前半の瓦当文様にいくつも見受けられ、それらを具体的に示してみたのである。

たとえば、額安寺出土の単弁六弁で構成される軒丸瓦、片岡王寺跡や新堂廃寺出土の単弁八弁蓮華文軒丸瓦は、明らかに古新羅の要素をそなえていると考えられる。片岡王寺跡や新堂廃寺例では、中房と弁区の間沈線というより、溝がめぐり、とくに片岡王寺跡例では、中房の蓮子は細い線でないように表現されている。以上の例は、少なくとも百済や高句麗の要素とは言い得ないものがあり、まさに古新羅の要素と言うべきものである。

一九九一年、天理市教育委員会による同市平等坊・岩室遺跡の発掘調査で出土した軒丸瓦は、幅広い蓮弁の中央に凸線をおき、弁区と外縁の間が広く離れ、外縁は幅広く、高い⁵⁹。飛鳥寺創建時の単弁十弁蓮華文軒丸瓦と百済瓦当以上に、この軒丸瓦は古新羅のものに酷似している。たとえば、韓国慶州市皇龍寺跡出土例とはまさに瓜二つの感がある⁶⁰。現在のところ、寺としての遺構は明確でないとのことであるが、いずれこの瓦を使用した堂宇が発見されることであろう。



平等坊・岩室遺跡出土軒丸瓦 (1:4)

それはさておき、このように酷似した軒丸瓦は、新羅から技術者が渡来したことを示す重要な資料といえることができよう。『日本書紀』には、推古二十四年や三十一年に新羅から佛像等もたらされたことが記されている。これら以外にも新羅との交渉を記した記事がいくつも見られる。かなり頻繁な交流のあったことが知られるのである。したがって、このような正式な際以外にも、新羅から技術もたらされた可能性を考える必要がある。いずれにせよ、わが国初期寺院の中には、朝鮮半島三国の要素が色濃く認められるのである。

八 まとめ

わが国における初期寺院に関して、どのような問題点が存在するのか、そのいくつかを取り上げてみた。寺院造営という、新たな技術によって行われた事業は、どのような立場にあったものによって進められたのか。これはより大きな問題点として存在するのである。当然のことながら、初期の段階においては政治的に強い立場にあっ

た者がこの事業に参画することができた。それぞれの造営者を見れば、飛鳥寺、若草伽藍、四天王寺、高麗寺、豊浦寺、北野廃寺という畿内各地で初期に造営された寺々にそのことがよく表れており、これらの寺で使われた瓦当の文様からも、相互に緊密な関係のあったことが説かれている。ここに見る関係は、まさに政権中枢部もしくはそれにきわめて近い位置にあった者の寺々なのであり、政治的なバランスの表れとも言えよう。

年代が降るとともに寺院造営事業は広まりを見せるのであるが、しかし、そこにも政治的な影響を感じとることができる。すでに八世紀に近い頃であるが、その最も顕著な例は和泉海会寺である。海会寺と政権中枢部との関係については別稿で述べたところであるが、畿内西南端の小郷呼叡郷に造営された海会寺の金堂に、木之本廃寺と四天王寺との同範軒丸瓦が使われている。そして塔には、川原寺式の整った文様構成をもつ軒丸瓦が使われている。呼叡郷のその豪族の名は明らかになっていないが、政権中枢部に居た者とは考えられない。この地が畿内最西南端で、しかも紀伊と接しているという点に、政権中枢部からの干渉があったものと考えられるのである。

朝廷が正式に仏教を受け入れた時期は明確でない。寺院造営事業がある程度広まった段階に決断が下されたものと考えられるのである。三宝の興隆が奨励されたり、皇太子による経典の講説があったとはいえない。唐からの情報が増えるにしたがって、その機運が高まり、舒明朝に大寺の造営が行われることになるのであるが、おそらくこれに近い頃に仏教は、正式なものとなったのではなからうか。いずれにせよ、舒明朝における大寺の造営は、唐との交流による影響と考えられるのである。仏教伝来後約一世紀を経、飛鳥寺建立後約半世紀という段階では、仏教観も何等かの形で変化していたものと考えられ、その反映として新たな伽藍配置による寺々の造営が行われたのであろう。

初期寺院に関して問題とすべき点はまだ他にもあろう。一例をあげれば、法会の「場」に関するところがある。寺であるからには、仏像や舍利を祭ることをはじめ、各種の法会を行う「場」があった。その「場」が必ずしも堂内とは限らないという問題点が残っている。かつて法隆寺と薬師寺の金堂内には、僧侶も入れなかったと言われ

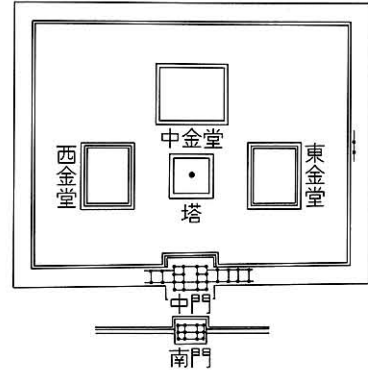
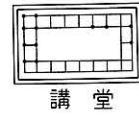
海会寺 (I B)

海会寺 (II A)

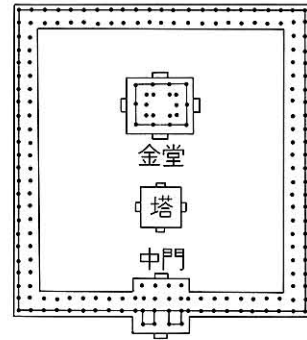
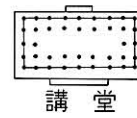
海会寺 (I A)

四天王寺

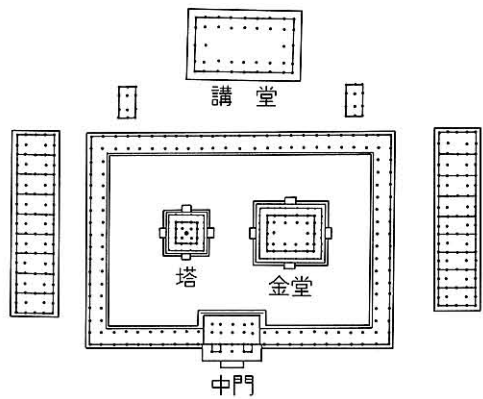
木之本廃寺



飛鳥寺伽藍配置図 (1:2,500)



山田寺伽藍配置図 (1:2,500)



法隆寺伽藍配置図 (1:2,500)

ている⁶¹。ということになると、法会は寺内のどこで行われたのであろうか。堂外の場合と、別の堂の場合とがあるろう。

小稿では、この問題にふれるゆとりがなかったが概要を述べておこう。たとえば山田寺では金堂前面に表面平坦な長方形の石が置かれ、河内・高井田廃寺では金堂前面に家形石棺の蓋の裏を平に削り、それを上面にして据えられていた。それらは礼拝石と考えられている。法隆寺西院金堂の正面にも、礼拝石と伝えられる石がある。堂外に僧侶が参列して行われる儀式の際にこのような石を踏んで、堂内の仏像をする儀式もあったのであろう。

礼拝ということでは、飛鳥寺の東西金堂や川原寺の西金堂について、これは金堂と考えるよりも、礼堂的な性格をもっていたのではないかとの考え方もある。あるいは、中門も礼堂としての機能を具えていた可能性も考えられている。飛鳥寺や山田寺の中門は梁間が三間である。一般に門の梁間は二間である。梁間三間の門は二間の門に北廂がついた形との考えである。それは、ここに僧侶が居並ん

で金堂と塔、すなわち本尊と舍利とを礼拝するのである。法隆寺の場合は梁間三間で、なお桁行四間という偶数である。礼拝供養の際、中央の柱を堺に左右同数の僧侶が配置されたのではないかと考えられている⁶²。このことからすれば、中門に礼堂的な性格があったとする考え方は妥当なものと言えよう。伽藍内における礼拝の形態も、遺構の上から一部分なりとも明らかにすることができ、古代寺院の変化の過程を知る手がかりとなるだろう。こうした面も古代寺院を考える上で重要な問題点のひとつと言えよう。

小稿作成にあたり資料の提供など、左記の方々に御配慮をいただいた。記して感謝の意を表したい。

京都市埋蔵文化財研究所上村京子氏、同鈴木久男氏、中村 敦氏、
 天理市教育委員会青木勘時氏、千葉県教育委員会博物館準備室中
 山吉秀氏。

- 1 「上宮聖徳法王帝説」(『寧楽遺文』下 八七三頁 一九六二年)
- 2 「元興寺伽藍縁起并流記資財帳」(『寧楽遺文』中 三八三頁 一九六二年)
- 3 林屋辰三郎「継体・欽明朝内乱の史的分析」(『古代国家の解体』一九五五年)
- 4 「扶桑略記」欽明天皇十三年条(『扶桑略記』二九頁『国史体系』十二一九三二年)
- 5 「扶桑略記」欽明天皇十三年条では、一に云うとして高さ一尺五寸の阿弥陀像と高さ一尺の観音・勢至像がもたらされたのである。
- 6 「Loc 15・20遺跡」(千葉県教育委員会『公津原II』二五〇頁 一九八一年)
- 7 「聖徳太子伝暦」上(『大日本仏教全書』一一二「聖徳太子伝叢書」十一頁 一九一二年)
- 8 註4に同じ
- 9 註1に同じ
- 10 註2三八五頁
- 11 坪井清足「川原寺・豊浦寺」(『飛鳥』近畿日本叢書』三 一七六頁 一九六四年)
- 12 金子裕之・千田剛道「和田廃寺第二次調査」(『奈良国立文化財研究所年報』一九七六 四八頁)
- 13 忠南大学校博物館「定林寺址発掘調査報告書」一九八一年
- 14 石田茂作「扶余軍守里廃寺址の発掘」(『総説時代寺院址の研究』一九四頁 一九四四年)
- 15 奈良国立文化財研究所「飛鳥寺発掘調査報告」(同研究所『学報』五十九頁 一九五八年)
- 16 小泉顕夫「平壤清岩里廃寺址の調査(概報)」(朝鮮古蹟研究会『昭和十三年度古蹟調査報告』凶版第六・九・十 一九四〇年)
- 17 註15の三六頁「註十五」
- 18 岩本正二・井上和人「坂田寺第三次調査」(『奈良国立文化財研究所年報』一九八一 五頁) 安田龍太郎・深沢芳樹「坂田寺第六次調査」(『奈良国立文化財研究所年報』一九九一 四頁)
- 19 「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」(『寧楽遺文』下三四四頁 一九六二年)
- 20 「上宮聖徳法王帝説」(『寧楽遺文』下八七〇頁 一九六二年)
- 21 「上宮聖徳太子伝補闕記」(『大日本仏教全書』一一二「聖徳太子伝叢書」五頁 一九一二年)
- 22 太田博太郎「法隆寺」(『南都七大寺の歴史と年表』三二頁 一九七九年)
- 23 「金銅薬師仏造像記」(『寧楽遺文』下 九六一頁 一九六二年)
- 24 文化庁文化財保護部記念物課「法隆寺若草伽藍跡昭和四十三年度発掘調査概報」十頁 一九六八年
- 25 森 郁夫「若草伽藍の瓦」(法隆寺「法隆寺発掘調査概報」II 二二〇頁 一九八三年) その後補訂して『日本の古代瓦』(雄山閣出版 一九九一年)に掲載
- 26 法隆寺「法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書」一八三頁 一九八五年
- 27 最近奈良・明日香村石神遺跡第十次の発掘調査で、若草伽藍出土の軒丸瓦との同范品が出土した。その資料は「若草伽藍出土例より范の中央部の傷みが明らかに少なく、肉眼による観察ではあるが胎土にも違いがある。従来は、若草伽藍の創建時に彫り加えが行われたと考えられてきたが再検討の必要がある」と報告されている(奈良国立文化財研究所「石神遺跡第十次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』二二二 六一頁 一九九二年)。しかし、石神遺跡に大量に供給されたこととはなく、飛鳥地域のどこかに供給された可能性なしとはいえないが、飛鳥寺の製品との区別を目的として瓦当范に手を加えたことに違いはない。
- 28 稲垣晋也「旧中宮寺跡の発掘と現状」(『日本歴史』二九九 一一〇頁 一九七三年)
- 29 奈良県立橿原考古学研究所「三郷町 平隆寺」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』四七 一九八四年)
- 30 横井廃寺は石田茂作「横井廃寺」(同氏「飛鳥時代寺院址の研究」三六七頁 一九三六年。古市廃寺は中村春寿「古市廃寺の調査」(『奈良県観光』四三 一九六〇年)
- 31 文化財保護委員会「四天王寺」一九六七年
- 32 「上宮聖徳太子伝補闕記」(『大日本仏教全書』一一二「聖徳太子伝叢書」四頁 一九一二年)

- 33 八木久栄「難波宮跡下層遺跡」瓦類(大阪市文化財協会『難波宮址の研究』八 一一六頁 一九八四年)
- 34 藤沢一夫「柏原市域の古代寺院とその性格―旧河内国大県安宿両郡にかかるとの―」(柏原市『柏原市史』四 一〇頁 一九七〇年)
- 35 森 郁夫「撰・河・泉の古代寺院と交通路」(大阪府教育委員会「宗教の道・舟の路」歴史の道調査報告 七 八一頁 一九九一年)
- 36 京都市埋蔵文化財研究所「北野廃寺発掘調査報告書」(同研究所調査報告書 七 三頁 一九八三年)
- 37 梅原末治「高麗寺址の調査」(京都府『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』十九 三九頁 一九三九年)
- 田中重久「高麗寺址発掘調査報告」(『聖徳太子御聖蹟の研究』四四六頁 一九四四年)
- 38 山城町教育委員会『史跡 高麗寺跡』一九八九年
- 39 藤沢一夫「新堂廃寺とその性格」(大阪府教育委員会「河内新堂・烏含寺跡の調査」『大阪府文化財調査報告書』十二 二九頁 一九六一年)
- 40 山田寺跡の発掘調査によって、塔・金堂を南北に配置する形では、北面回廊が四天王寺のように講堂の両妻にとりつくものではなく、本来塔・金堂と講堂の間で閉じるものであることが明らかにされた。四天王寺は造営期間が長期にわたったために、もともと塔・金堂の背後で閉じるべきものがある時期に設計変更があつて、回廊が講堂にとりつく形になったものと考えられる。小稿では、伽藍配置は金堂と塔の配置に注目しているので、従来から用いられている四天王寺式の名称にした。
- 41 榎本杜人「法輪寺の発掘調査」(『美術史』四 四七頁 一九五一年)
- 42 宮本長次郎「法輪寺塔基壇の発掘調査」(『奈良国立文化財研究所年報』一九七三 五〇頁)
- 43 林 博通「穴太廃寺」(小笠原好彦他『近江の古代寺院』一三八頁 一九八九年)
- 44 『日本書紀』推古三十一年七月条
- 45 「職官九 諸部下 将作監」(『通典』一六〇頁 一九六二年)
- 46 「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」(『寧楽遺文』中 三六六頁 一九六二年)
- 47 鬼頭清明「仏教受容と伽藍の創建」(『季刊考古学』三四 二五頁 一九九一年)
- 48 清水真一「山田寺東回廊の調査」(『奈良国立文化財研究所年報』一九八三 三一頁)
- 49 註26 一六八頁
- 50 大阪府教育委員会「河内新堂・烏含寺跡の調査」(『大阪府文化財調査報告書』十二 九頁 一九六一年)
- 51 泉南市教育委員会『海会寺 海会寺遺跡発掘調査報告書―本文編―』四二頁 一九八七年
- 52 奈良国立文化財研究所「川原寺発掘調査報告」(同研究所学報 九 一九六〇年)
- 53 文化庁文化財保護部記念物課『法隆寺若草伽藍跡昭和四十三年度発掘調査概報』一九六八年
- 54 註51 一七四頁
- 55 「法起寺塔婆露盤銘」(『寧楽遺文』下 九六六頁 一九六二年)
- 56 横山浩一・吉本堯俊「京都市幡枝の飛鳥時代瓦陶兼業窯跡」(考古学協会『昭和三十八年度大会研究発表要旨』一九六三年)
- 57 宇治市教育委員会「隼上り瓦窯跡発掘調査概報」(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』三 一九八三年)
- 58 森 郁夫「瓦当文様に見る古新羅の要素」(京都国立博物館『畿内と東国の瓦』二一五頁 一九九〇年)
- 59 天理市教育委員会『平等坊・岩室遺跡 第八次発掘調査概要』十頁 一九九一年
- 60 文化財管理局 文化財研究所「皇龍寺遺跡発掘調査報告書」I 一六九頁 一三〇番軒丸瓦 一九八四年
- 61 太田博太郎「南都六宗寺院の建築構成」(『法隆寺と斑鳩の古寺』日本古寺美術全集 二 九四頁 一九七九年)で「法隆寺の金堂内には住職が交替する時だけ入り、薬師寺金堂の内陣には誰も入ることを禁じていた」と述べている。
- 62 岡田英男氏の御教示による。